

第1専攻 文芸翻訳（出版翻訳）のマーケット

出版翻訳の市場規模は、正確な統計はありませんが、年間およそ1000億円と言われてい
ます。これは、翻訳書の売上ではなく、出版される書籍の翻訳料・印税として翻訳者に支払
われる金額の合計です。

書籍として出版されるばかりではなく、近年では電子出版が急速に増加しています。後者
は前者に比べて初期費用が低額で、在庫も持たずに済むことから、「気軽に出版翻訳できる」
時代になったと言えます。

以下、ジャンル別に文芸翻訳マーケットの概要を見ていきます。

<ヤングアダルト>

英語圏ではYA (Young Adult) というジャンルが確立しており、書店でも大人向けのフ
ィクションとは別に、同じくらいの規模の書棚をYAが占領しています。YAは、その名の
通り、10代の思春期の少女から20代の青年までを対象としたジャンルで、その中にミ
ステリ・ファンタジー・SF・ロマンスなど、様々なサブジャンルが存在しています。言い換
えれば、YAとは、作品の内容に関係なく、対象となる読者層だけを絞り込んだジャンルで
す。

一方、日本には、英米圏と同じヤングアダルトという明確に区分されたジャンルはありま
せん。主に小学生を対象とした「児童文学」、10代の少女を対象とした「ジュブナイル」、
思春期のロマンスを描く「少女小説」「ジュニア小説」などが、昔から存在していました。
そして、21世紀以降、その延長線上に進化を遂げ、現在マーケットを席卷しているのは「ラ
イトノベル」(ラノベ)と呼ばれるジャンルです。読者対象は10~20代で、まさにヤング
アダルトとオーバーラップしています。

ところが、出版されているラノベの99%は日本人の作品で、翻訳書は皆無といいい
現状です。そのため、海外のヤングアダルト作品を翻訳した場合、「児童文学」として扱わ
れるか、年齢層を問わないエンターテインメントの一環として出版されるのが一般的です。
これは、別の見方をすれば、翻訳されていない傑作・名作が数多く埋もれていることになり
ますし、「ハリー・ポッター」のような大ベストセラーを掘り当てることも夢ではありません
。今後の期待大のジャンルだと言えます。

付け加えれば、コンテンツが豊富な日本のラノベを外国語に翻訳し、海外に輸出する動き
も活発化しており、この分野でヤングアダルトの翻訳者が活躍する舞台が整ってき
ています。

<エンターテインメント>

現在、出版されているフィクションは、一部の純文学を除き、大部分がエンターテインメントであると言ってもいいでしょう。内容によって、様々なサブジャンル——ミステリ、サスペンス、SF、ホラー、ファンタジー、ロマンスなどに分かれ、国内外問わず、多くの作品が出版されています。

フィクションの翻訳に関して言えば、毎年たくさんの作品が出版され、それなりにコンスタントに売れているものの、amazonの年間ランキングで上位に入るようなベストセラー作品は、ここ数年、出ていないのが現状です。出版社も、「ハリー・ポッター」シリーズや「ダビンチ・コード」に匹敵するようなキラーコンテンツを探しています。

売れ筋について考察してみると、次項で述べるようにロマンス小説はマーケットを伸ばしていますし、評価の定まった大物（ダン・ブラウン、スティーヴン・キングなど）の新作は堅調です。また、映画の原作なども、映画公開とのタイアップによってブームとなり、一時的に大きな売上となります。さらに、英米圏以外の国（独、仏、北欧など）のミステリなどを積極的に翻訳紹介する出版社も出てきています。

上記のような状況から、出版社も第2の「ハリー・ポッター」、第2の「ダビンチ・コード」を探そうと躍起になっています。現代ではインターネットの普及により、個人でも海外の作家の作品を直接チェックできますので、これはという作家や作品を見つけ、出版社に翻訳出版を提案することも手軽にできるようになっています。

<ビジネス書>

黒船の来航以来、日本人は西洋の知識や情報を貪欲に取り入れては、豊かさを求めてきました。戦後も、高度成長時代も、バブル崩壊後も、その基本姿勢はどうやら変わっていないようです。特に経済的繁栄を目的とするビジネスマンや投資家らは、斬新な財テクや経営手法を求めており、英米圏の実践的理論や成功事例に倣おうと、常に新情報を求めています。

そのため、書店でビジネス書の棚を覗けば、常に目新しい経済・経営の指南書が並んでいます。ジャンルも多岐にわたり、業種別、会社別、ビジネスプロセス別、経営者向けや現場社員向け、入門書から上級編まで、焦点を絞り込んだラインアップが揃っています。海外で話題・評判になったものは、日本でも売れ筋となるようです。ただし、ドラッカーのようにロングセラーになるものはごく一部で、はやりすたりが大きく、書物の回転もフィクションに比べて早いようです。

<スピリチュアル>

ビジネス書が、物質的充足を目的として読む本なのに対し、スピリチュアル系の書籍は精神的充足を目的として読む本です。どちらも人間にとって基本的な「欲」を満たすためのものですから、ニーズは常に存在していると言えます。

特に現代は、先が見通せない不安の時代です。不安を解消するため、精神的よりどころを

求める人々にとって、心の平穏・癒しを与えてくれるスピリチュアルなアドバイスは救いの手となります。現代の世相を見る限り、スピリチュアル系の書籍に対するニーズは、ますます増加していくことでしょう。

<ポピュラーサイエンス>

ビジネス書やスピリチュアル系の書籍は、物質的または精神的充足という「欲」を満たすために読むものですが、ポピュラーサイエンスは、別の「欲」——「知識欲」を満たすための書籍だと言えます。直接、生活に役立つわけでもなく、金儲けにつながるわけでもない——それでも人は、宇宙や深海の謎、生き物や鉱物、微小な原子の世界などに想いを馳せ、知的興奮を味わおうとします。

どのようなテーマの書籍が売れ筋になるのか、予想が難しいのが、このジャンルの特徴とも言えます。ノーベル賞を受賞したテーマや、実際に科学界で大発見が行われた分野などの関連書籍は、爆発的にブームとなりますが、事前にそのようなことを予測するのは困難です。

文芸翻訳者となる手段

通常、出版社では、以下のような流れで翻訳書の出版を行っています。

①原書の選択 → ②著作権の確認／取得 → ③原著者（またはエージェント）と翻訳出版契約 → ④翻訳者の選定 → ⑤翻訳・校正・編集 → ⑥出版（書籍・電子）

④のステップで翻訳者に選ばれれば、出版翻訳者になれるわけですが、声がかかるのは実績ある翻訳者ですから、無名の個人に声がかかることは、まずありません。

①の段階で、有望な作品として原書を提案することはできます。その場合、シノプシスを書くか、訳文自体を持ち込んで売り込み、出版社が興味を示せば、以降のプロセスに進むことも夢ではありません。場合によっては、翻訳を任されることもあり得ます。とはいえ、このような可能性は大きなものではありません。根気よく何度も挑戦する覚悟が必要です。

もう一つ、自費出版という手段もあります。自分で著者やエージェントと交渉して著作権を得られれば、自分で翻訳して出版すればいいわけですが、著作権料も出版費用もすべて自費で賄わなければなりません。相談に乗ってくれる自費出版専門の出版社もありますし、冒頭で述べたように電子出版の普及により負担額が減り、自費出版のハードルは従来よりも大幅に低くなっています。とはいえ、出版したものが売れるかどうかは別問題ですが。

文芸翻訳者に必要な条件

①ノンフィクションの場合、書かれている事実を正確に日本語に移し替えることが大切です。また、読者層によって、記述されている内容に関して補足説明をする必要も出てきます。そのためには、十分に背景調査をして、関連情報をしっかりと入手しておかなければならず、

「調べもの」が非常に重要になってきます。もちろん、原文に書かれていることを、わかりやすい自然な日本語で表現し、リーダビリティ（読みやすさ）も意識しなければなりません。

②一口にノンフィクションと言っても、様々なジャンルやサブジャンルがあります。どれか一つ、自分が得意なジャンルを確立しましょう。例えば、宇宙に関するサイエンス・ノンフィクションを翻訳するには、宇宙に関する最新の科学知識や歴史情報などを、しっかりと心得ていなければなりません。「マニアは強い！」——このことをお忘れなく。

③残念ながら、駆け出しの翻訳者の場合、出版翻訳一本で生活できる収入は、まず得られません。生活を安定させるための、別の収入源を確保しておきましょう。

④自分の実力を、客観的に知っておくことが大切です。自分の「翻訳」が、商品になるレベルに達しているのか確認し、まだの場合は実力を伸ばすために努力する必要があります。

文芸翻訳者に必要な条件を満たすには

①たくさんの本を読みましょう。一朝一夕にはいきませんが、多くの本を読んでいるうちに、様々な表現のパターンが身につき、表現力の「引き出し」を増やすことができます。また、特定のジャンルの本を集中的に読めば、そのジャンルの専門知識や特定のパターン・約束ごとが身につき、得意分野を確立できます。

・シノプシスをたくさん書いてみましょう。出版社に原書を提案する際にも、簡潔でわかりやすいシノプシスがあれば、大きな武器になります。あまり大げさに考えず、まずは、自分が読んで面白いと思った本を友人知人に紹介するつもりで、気軽に書いてみましょう。ブログなどで読んだ本の紹介を定期的に発信するのも、お勧めです。

・原書とプロの翻訳を読み比べてみましょう。あるいは、気に入った原書を自分で訳してみ、プロの翻訳家の訳文と比較するのも、とても勉強になります。プロの手法を肌で感じることもできますし、時にはプロの誤訳（笑）を見つけて反面教師にすることもあるかもしれません。

・翻訳能力検定試験を受けてみましょう。自分の実力を、客観的に知ることができ、繰り返し受験することで、自分の成長も実感できます。また、検定に合格して資格を得れば、翻訳者としての自分を紹介する際のステータスにもなります。